

幼児の教育の条件

牛島 義友



幼児教育に関する意見を問われると私の考えは以前と変わっていないので、つい同じことのくり返しになって恐縮であるが、いくつかの論点にまとめて述べたい。

1 家庭教育の立場から 中教審の答申においても、家庭教育の重要さを述べていることはありがたい。しかしこれは言葉の上の尊重であって、実際の教育施策の方向は軽視の方にすすんでいるようで、気になって仕方がない。

元来学校教育は家庭教育を補完するものであり、特に幼児教育は家庭教育を中心として行なわれるのが望ましいと考えている。このためには家庭に教育の権利と義務を与え、家庭教育の場をできるだけ尊重することが必要である。家庭から早く切りはなして学校で教育するということは、それだけ家庭教育の場を縮小することになる。もし家庭教育が十分に行なわれる条件にあるならば、よい養育者がおり、安全で文化的な場所があり、また遊び友だちにも恵まれているならば、家庭のなかだけで幼児時代を送ってもよいし、否その方がよい。ただ今日はこれらの

条件が悪くなり、社会性をつけるためには幼稚園の集団生活でおきなう。また保育に欠ける場合には保育所で保育することも必要となってくる。しかしあくまで家庭教育が主となるべきものである。

ところが、この考え方が日本ではなかなか確立されない。不完全な、未経験な親が育てるよりも、専門の施設で育てる方がよいと思ったり、家庭で教育することは教育と思わず、学校教育のみが教育であると思いつこんでいる人も少なくない。早くから学校教育を開始しなければ立ちおくれる、というふうな考えでもあるとすれば、まずこの点が是止され、親たちに家庭教育の課題と自信をつけさせることが第一ではなかるうか。アメリカでも幼児の早期教育のために Head Start の政策がとられているというが、これは主として、家庭教育や教育環境に恵まれない disadvantaged children のための旋策であってすべての子どもに一樣に幼児学校教育を開始せよというのではない。

2 幼児の発育がよくなったか 最近の幼児の発育は以前

よりもはるかによくなり、五歳児から学校教育を始めることも可能であるといった意見がこの度の教育政策の根拠の一つであるならば、この点はずっと正確に調べられねばならない。いつの時代においても「このごろの子どもは昔よりすすんでいる」との印象を与えるが、これは共通の錯覚現象である。今日の日本の子どもは、どれだけ以前の子どもと変わっているであろうか。乳児期の栄養指導は大きく変化し、からだも大きいし、歩き始めるのも二カ月ぐらい早くなったようである。その後の身長体重の発育はたしかに戦前のものにくらべてよくなっている。しかし体力となると戦時中の幼児と同じ体力検査を行なっていると、二十五メートル疾走とか、立ち幅とびなどで約一歳分おかれている。

すなわち栄養がよいのでふとってはきたが、運動不足（遊び場の不足が原因）でかえって体力は劣っている。知能の発達に關しても、たとえば愛育研究所では毎年二千五百人以上の幼児の知能検査を、戦前につくられた乳幼児検査や、鈴木ビネー検査で行なっているが、戦前の標準を変える必要はおこっていないし、昭和二十七年以後の、平均知能指数をみても、ほとんど毎年同じ値であり、上昇の傾向は見られず、最近は低下の現象が現われている。あるいは日本保育学会が昭和二十九年度に全国幼児の精神発達や運動機能、社会性について全国的調査を行

ない、十五年後の四十四年に同じ方法で調査を行なったが、この間発達の向上は見られず、むしろ多くの点において十五年前より悪い結果を示している。これが我々がもっている幼児の発育に關する科学的知見である。

したがって最近の子どもの発育がよくなっているとするのは誤まりであって、むしろいろいろと困った発育阻害現象が現われているのが実情である、特に都会における幼児の生活は安全な遊び場はほとんどなくなり、家の中にもりがちであり、特に高層住宅の上の方にでも生活していると、一日中いくらも戸外に出ることはないし、よい住宅ほどエアコンディションで、密室内での生活となり、太陽、空気、土などの自然から遮断され、その代りに、テレビを通して強烈な感覚的刺激だけをうける。これはあくまで受け身の刺激であって learning by doing とはおよそ正反対の姿である。これでは体だけふとってくるのは当然であろう。この事態を、いかに解決するかがむしろ幼児教育の今日の課題である。広い運動場と仲間を与えるための幼稚園が必要であるというのは分かる。また自然をとり戻すために幼児たちをつれてキャンプをするというようなのは大変結構である。しかし幼児だけをつれて数日間のキャンプをするとなると、教師の人手や費用を考えるととても大変なことであり、学校側としてできることではない。それよりも、親と一緒に自

然生活を取戻すような厚生計画などの方が適していよう。今日の幼児の生活環境を改善することは早急の仕事ではあるが、学校教育とは別問題である。

3 遊びの生活を尊重せよ

幼児の遊びの生活はもつとも

自然な姿であり、そこには子どもの活力と休養、探求心と反覆練習、精神の緊張と弛緩が調和された状態である。この自然の姿が最高のものとは思わないし、能率的とも思われない。幼児の発達にもつと効果的な刺激を加える方法もあるはずである。

しかし今日の児童心理学や幼児教育学の知識や技術は、すべて科学的に計画し遂行しても安全であるといえるほど発達していない。自然の親子関係を切つて完備した乳児院で育ててもかえつてホスピタリズムになる危険が多い。一部の才能の強化訓練は性格や適応性を害するという危険性も考えられる。今日進歩した自然科学においてすら多くの公害を生み出して、その功罪が問われている。自然の破壊よりもつと恐ろしい人間性の破壊がおこる危険性もある。安全性からいえば子どもたちは自然に育てるのが一番よいといえる。新しい科学的工夫を加えるには、その先導的試行は十分慎重にかつ厳密に行なわれねばならない。思いつきの早教育などをやるべきではない。

また幼児の遊びの生活は創造性の芽を養い、大きくたくましく成長するために必要な肥料のようなものである。子どもが

遊ぶのと老人が遊ぶのとは意味がちがう。今日人の寿命は恐ろしく延長し、一生を通して、働かなくともよい時期、(働かなくとも仕事のない時期を含めて) が非常に長くなった。とすれば幼少時に十分遊ばした方が賢明ではなからうか。早く学校にはいり、早く卒業し、就職して五十五歳ぐらいで退職するような生活は改められ、むしろ十分幼年期は遊び楽しみ、学生時代は十分教養をうけてから職業生活にはいり、七十歳ぐらいまでは仕事についていられる方がよいのではなからうか。何も急いで学校に入れる必要はなからう。

4 財政問題

親が子どもの教育のために教育費を出すことは結構なことである。また親としてはできるならいくらでも子どもの教育のために出してやりたいものである。娘の結婚費用に莫大なお金をかけるよりは教育に投資した方がよい。しかしこの親が直接教育費を支払わないで、税金の形を通してまかなうことには簡単に同意できない。税金の形をとれば富の補配分の効果はあるが、媒介としての官僚機構に権力が発生するし、またむだも多い。このような機構は小さいほど人々の自由は大きいわけである。

幼稚園を義務制にすれば保育料が安くなると単純に喜ぶのはまちがっている。今の教育費よりもつと多額の費用を税金の形で使うことになる。この場合、学校教育がどうしても不可欠の

ものであればやむをえない。たとえば高等学校の教育を家庭でやれといっても不可能である。専門の教師を揃える点からいってもまた生徒たちの心構えからいっても、この時期においては学校教育が圧倒的な比重を占め、家庭教育はその学校教育の緊張を休めることくらいにしか役立たない。しかし四、五歳の幼児に対してはその知識教育は家庭においても十分行なうことができるし、また時間的にいっても幼稚園教育の時間は短時間であって大部分は家庭での時間となっている。したがって幼稚園一年間の学校教育の効果と、高校一年間の効果とはかなりの相違がある。このようないい方をするとう児教育者から叱られるかもしれないが、ここでは学習効果の絶対的分量だけを取り上げて比べた訳である。

他方日本の母親たちは、子どもの教育に熱心である。世界中でこれほど子どもの教育に熱心な親はないといえよう。しかしこの教育熱心とは学校教育への熱意であり、よい幼稚園に入れ、音楽教室に通わせて、よい家庭教師をつけるということに異常に熱心である。その割に自分で子どもの教育をしようとはしない。否、我流の教育をしてはいけないと思っているらしい。家庭で文字などを教えてはいけないとか、音楽を教えるにしても母親が教えたのではかえって不正確な音感にしてしまいはしないかと恐れている。これはおかしなことであって、親が子ども

を教育するのは当然の義務であり権利である。また生活にとって一番基礎となる身辺生活の自立は親がしつめたものであり、また知的発達の基礎となる言語の習得も、母親や祖母たちが家庭にあつて熱心に教えたもので、なにも幼稚園に行つて習うわけではない。さらに今日の母親たちは以前よりも子どもの教育者としてはよい条件をそなえている。家事は合理化されて余裕ができ、子どもの数は少ないので濃厚な指導ができる（過保護の弊害さえあるが）。また母親自身の教育程度も非常に高くなってきた。この母親に子どもの教師の役がつとまらないはずがない。ただ彼女は教えてはいけないという束縛を自分の心に加えているだけである。ゆえにこの束縛を取り去り、積極的に自分の子どもの教育をするように方向づけ、勇気づけ、自信をつけさせるならば、非常によい教師が子どものそばにおることとなる。しかもこの教師には俸給を払う必要はない。すなわち母親たちを教育の場に動員し、その教育を尊重し、勇気づけるならば、それだけで完全なよい幼児教育ができるはずである。すなわちこれは税金を一つも使わずに幼児教育の効果をあげる方法でもある。国は、このようなよい教師（母親）を得られない子どもに対する教育だけを配慮したらよい。母親という有能な教育的人的資源を考えないのはなぜであろうか。